

国境を超える「言語文化圏」を巡る旅
—イタリア北部の小都市文化の研究—

18AR139 小部 陽香里

本研究旅行では、「国境」と「文化圏」の差異に基づく、言語文化圏の広がりについて調査を行った。なぜならば、そのような文化の広がりには、異国の人たちが、違いを超えて共感する不思議な結びつきや可能性があり、興味を抱いたからだ。

そこで、目的地として、イタリア領コモと、スイス領ルガーノを中心に、イタリア北部の国境を挟んで点在する地方都市、ボルツァーノとトリエステへ訪れた。各都市での具体的な調査内容は、①言語文化圏に焦点を当てて、文化の広がりを調査し、②共通した言語文化圏をもつ歴史的背景の情報収集、③食文化などの地方文化の特徴を発見することである。

上記の調査を通して、国境とは異なる北イタリアの地方文化の広がりと魅力について明らかにすることが、本研究旅行の目的である。2つの国をまたぐ言語文化に焦点を当てることで、国家や国境という概念について新たに考える機会を得、4年次の卒業論文に展開するための資料を収集ができることを期待する。

2016年 研究旅行奨励制度



国境を超える「言語文化圏」を巡る旅

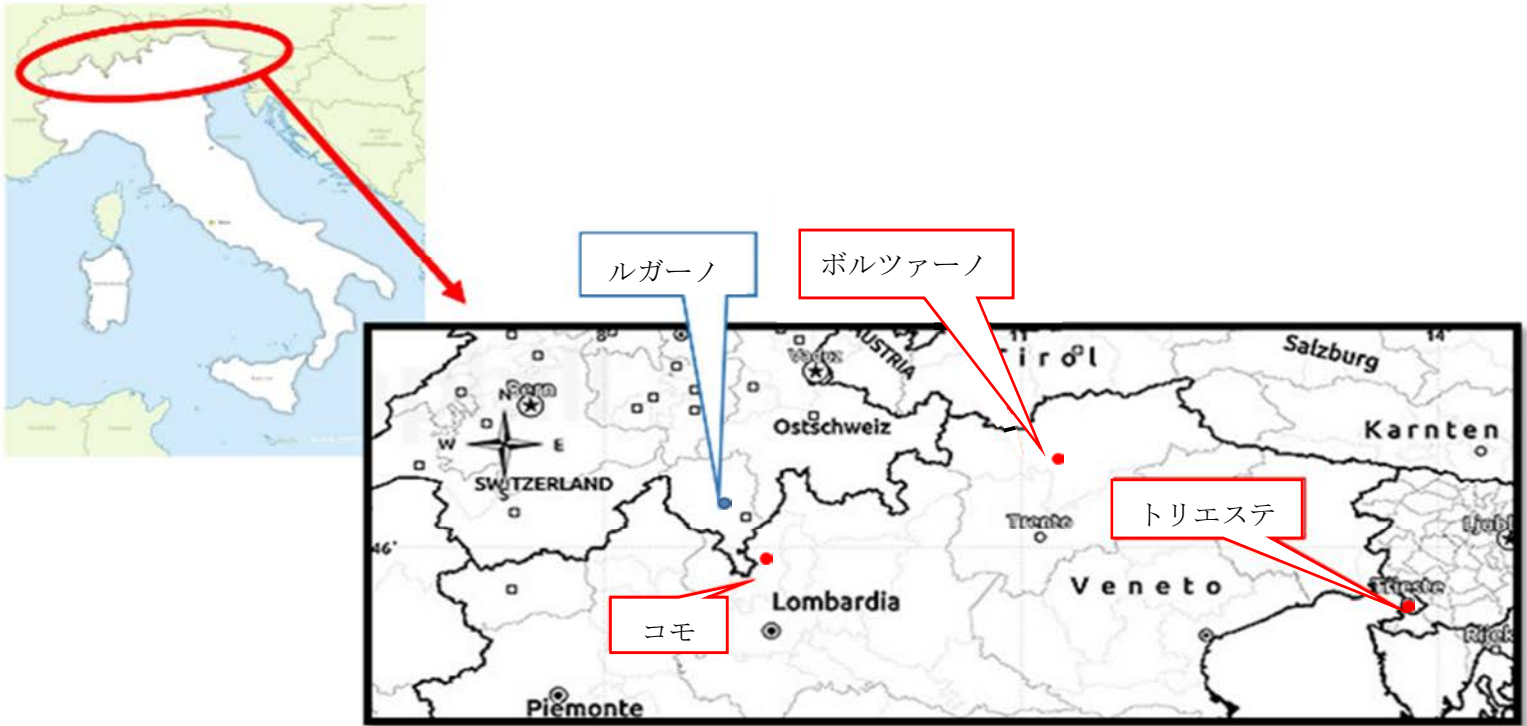
—イタリア北部の小都市文化の研究—

18AR139 小部 陽香里

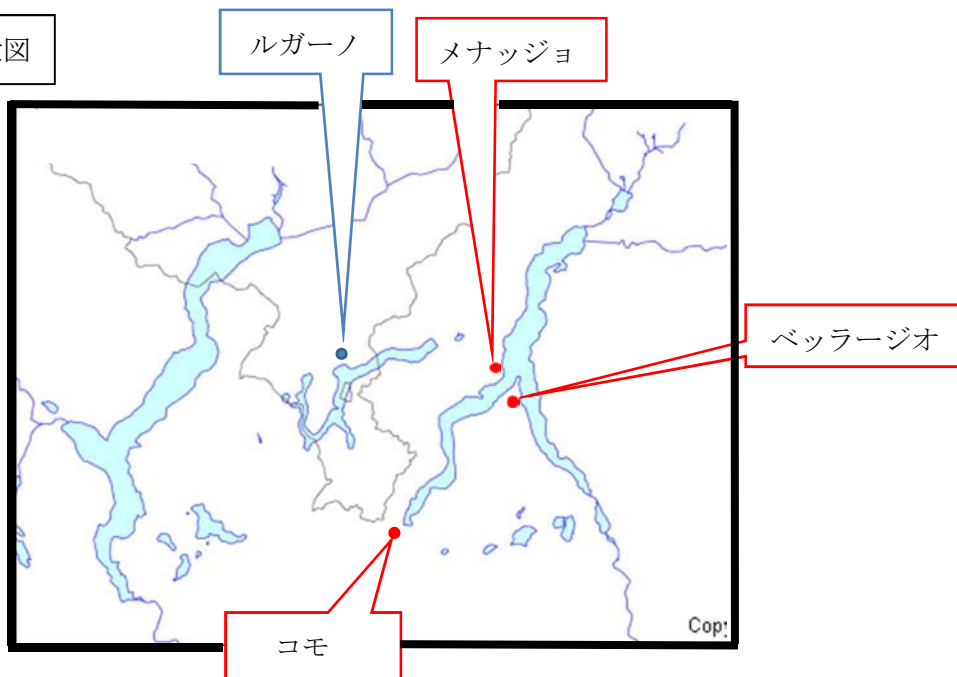
●研究調査地

- ・イタリア北部3都市：コモ、ボルツァーノ、トリエステ
- ・スイス南部：ルガーノとその周辺都市

イタリア北部国境地帯 拡大図



コモ湖水地方 拡大図



●研究目的

国境と文化圏は決して一致しない。私たちは時に、ひとつの国の文化は、国境によって隣の国の文化と完全に断絶されているような錯覚を抱いてしまう。国境とは、地理的、あるいは人為的要因によって特定の時代に人が勝手に定めたものだが、文化の領域や境界は、人間の生活や歴史の中で長い時間をかけて、緩やかに変化している。国境を挟んだ違う国で全く異なる文化が育まれながらも、同時に、類似した特定の食文化が存在したり、時には同じ言語を話したりする。筆者は、そのような国境と文化圏の差異に興味を抱いた。なぜなら、そのような文化の広がりには、異国の人たちが、違いを超えて共感する何か不思議な結びつきや可能性があるように思えるからだ。そして、そのような国境を挟んだ文化的状況は、四方を海に囲まれ陸続きの国境を持たない日本に住む者には、体験し実感することはなかなか難しい。

筆者は、これまでの所属ゼミでイタリアの歴史や文化について学んできたが、そのなかで、上述のような国境と「文化の境界」の差異は、複数の国との国境をもつイタリア北部でも面白い形で存在していることを知った。例えば、スイスとの国境付近の歴史都市コモ (Como) を中心とする湖水地方だ。そこでは、イタリア語の言語文化圏は、国境を越えてスイス南部のルガーノ (Lugano) 地方まで拡大している。すなわち、イタリア語はスイス南部地方の公用語でもあるのだ。また、イタリアのコモとスイスのルガーノでは、ロンバルド語というイタリア語の方言の一種が共通して話されているが、それは、コモよりもむしろスイスのルガーノ地方の方で盛んに話されているという興味深い現象が起きている。つまり、イタリア語のある方言が、現在の国境を基準にすると、むしろ「外国」で盛んに話されているのだ。

今回の研究旅行奨励制度では、イタリアのコモからスイスのルガーノを主要な調査対象地域とし、国境を挟んで点在する地方都市を巡り歩きながら、イタリア語言語文化圏の広がりとその実態の研究調査を実施した。同時に、後半部分では、オーストリアとの国境付近に存在する地方都市ボルツァーノ、加えて、スロベニアとの国境にあるトリエステも調査対象地に加えた。なぜなら、ボルツァーノでは、イタリア都市であるにもかかわらず、住民の実に約 70%がドイツ語を流暢に話し、同時に、イタリア語の古典語であるラテン語の特徴を多くとどめた歴史的少数言語のひとつ、ラディーノ語が今でも話されているというからである。これらのイタリア北部国境地帯の小都市における言語文化を調査することで、国境とは異なる地方文化の広がりや多様性、そしてその魅力について明らかにすること、これが本調査の目的である。

●期待される成果

イタリアとスイスの国境を挟んだ小都市を中心に巡りながら調査することで、その国境付近固有の地方文化の魅力を学ぶことが出来る。同時に、2つの国をまたぐ言語文化に焦点を当てることで、国家や国境という概念について、あらためて考え直す機会を得ることが出来る。さらに、4年次の卒業論文執筆に向けた貴重なデータや文献資料を収集することができる。

●調査方法

各都市の使用言語の実態や特徴について、以下の項目を中心に調査を実施した。

- ① 共通した言語文化圏をもつに至った歴史的背景などを、博物館や郷土資料館などで資料収集を行う。
- ② 博物館学芸員の方々や現地住民の方々に、その地域のイタリア語の特徴や微妙な違いなどについて聞き取り調査する。(事前に詳細な質問項目をイタリア語で作成する。)

- ③ 訪れたすべての地方都市について、言語だけでなく、その町の建築の特徴や人々のライフスタイル、食文化の特徴などについても、滞在期間中にできる限り具体的に観察しながら調査する。

●研究日程

2016年	滞在地	行動・調査内容
8月5日	日本→ミラノ	移動日
8月6日	ミラノ→コモ	移動日
8月7日	コモ	市立博物館 (考古学博物館、ガリバルディ博物館)
8月8日	コモ	ベッラージオ、メナッジョ イタリア北部地帯の小都市文化の調査
8月9日	コモ	都市内の使用言語調査
8月10日	ルガーノ	現地の方へインタビュー、聞き取り調査
8月11日	ルガーノ	RSI (スイス公共放送局)
8月12日	ルガーノ	CDE (Centro di dialettologia e di etnografia) 研究所
8月13日	ルガーノ	ルガーノ大学
8月14日	ルガーノ	都市内の使用言語調査
8月15日	ルガーノ →ボルツァーノ	移動日
8月16日	ボルツァーノ	ボルツァーノ市立博物館
8月17日	ボルツァーノ	ボルツァーノ自由大学
8月18日	ボルツァーノ	ボルツァーノ凱旋門
8月19日	ボルツァーノ	都市内の使用言語調査

8月20日	ボルツァーノ →ヴェネチア	移動
8月21日	トリエステ	Foiba of Basovizza (フォイベ甌穴)
8月22日	トリエステ	カステッロ
8月23日	トリエステ	都市内の使用言語調査
8月24日	トリエステ	予備日 (空港付近のホテルへの移動などを含む)
8月25日	ヴェネチア →日本	移動
8月26日	ヴェネチア→日本	帰国

●はじめに

本研究では、テーマである「国境を超えた文化の広がり」を明らかにするために、訪問する各都市の言語文化圏に焦点を当てて調査を行った。このような言語文化圏に興味をもち、本研究旅行のテーマとして選んだ理由についてはすでに冒頭で述べた通りである。筆者は、特に、所属ゼミでの学びを通して、イタリアが意外にもEU圏の国々の中で最も多くの言語が話される国のひとつであることを知り¹、イタリアの国境を越えて行き来しながら、言語文化圏を中心とした「文化の広がり」を調査するという研究調査の着想を抱くに至った。

この研究テーマのもとに、まず、調査旅行出発前の事前準備として、文化圏の広がり背景として考えられる各都市の歴史に関する資料の収集と学習に努めた。現在のような国境が定められた歴史的背景を知ることで、文化の広がり（文化圏）と国境との差異が発生した背景について考察する資料とするためである。そして、このような各都市に関する事前学習で収集した資料を携えて、実際の調査旅行に臨んだ。現地では、博物館や郷土資料館などの研究機関、学芸員の方々や地元の方々との交流を通じた研究調査によって、事前研究では得ることのできなかつたより具体的な情報資料やデータを収集することができた。このような研究調査によって得られた資料をまとめながら、また、イタリア北部小都市の多様な姿とその魅力を紹介しながら、以下、「国境を超えた文化の広がり」について研究報告を行う。

¹ イタリア国内では、20の言語が使用されている。（近年の移民がもたらした諸語を除く）

●研究報告

コモ - Como -

【都市の概要】

イタリア北部のロンバルディア州に位置するコモは、アルプスの山々を背にした湖水地方の小都市で、かつて絹を中心とする繊維産業として、また、北部イタリアの商業の中心のひとつとして栄えた。また、何にもまして眼前に広がるコモ湖の美しさがこの街のシンボルであり、古くからヨーロッパでも有数の避暑地として人々を魅了してきた。実際に、筆者がコモを訪れたとき、真夏の地中海地方とは思えないほど穏やかな日差しのもと、湖からの風が心地よい清々しい気候であった。アルプスを仰ぐ青空のもとで美しい歴史的街並みを散策すると、この湖水の歴史都市が人々を惹きつけて止まないわけが十分に納得できる。

コモ旧市街には、歴史を感じさせる街並みが保存されているが、同時に、目抜き通りにはブランドショップが立ち並び、洗練された近代都市の雰囲気も感じられた。旧市街は車両侵入が規制されており、街の伝統的景観がしっかりと守られている。そのため、細い石畳の路地にまで賑やかに人々が行き交い、その路地は街の中心となるドゥオーモ（大聖堂）が聳え建つ広場へとつながっている。店中から路地や広場までテーブルと椅子を広げたバル（カフェ）やレストランなどは、歴史と自然が織りなす美しい景観を楽しみながら夏のひと時を過ごす人々で活気づいており、典型的な現代イタリアの都市文化を感じさせる風景がそこにあった。



図1 コモ旧市街の遠景



図2 コモ湖畔の景色

【市立博物館 - Museo civico -】

この博物館の内部は、考古学博物館とガリバルディ博物館に分かれている。前者は、歴史都市コモから出土したローマ時代の遺物から18・19世紀の絹製品などまで、後者はリソルジメント関連の資料が数多く展示されている。

この博物館の展示物等を通して、古代ローマのコモから、中世都市国家コムーネとして同じ都市国家のミラノと戦ったコモ、さらには、ルネサンス時代や後の新



図3 市立博物館

古典主義時代を経た、歴史の中の都市コモの変遷の全体像がよりよく理解できた²。このような歴史をもつコモが、近現代に入り、絹織物業で栄え、今日の商業都市・保養観光都市へと発展したのである。古代から現代に至る歴史都市コモの歴史的背景を知るうえで、貴重な博物館調査を行うことができた。

【ベッラージオ - Bellagio - 】

コモの街から北東に約 30km、湖の遊覧船で約 2 時間の船旅を楽しむと、「コモ湖の真珠」と呼ばれる歴史都市ベッラージオに到着する。船着き場近くの湖の水際は、水着で日光浴を楽しむ人々や家族連れの観光客で賑わっていたが、急な坂に沿って通りを登っていくと、洒落たレストランや土産物屋が軒を連ねて続いており、やがて古い建物の屋根の向こうに青空と湖が見え隠れする（図 5）。つまり、湖から丘へと続く傾斜地の起伏を活かした町並みの地形的変化が、この町を散策する者に、自然に溶け込むような町の空間と景観を楽しませるように機能している。ここでは、ローマやミラノのような喧噪に満ち溢れた大都市では決して体験できないような、緩やかに流れる時間や自然に包み込まれるような安心感を味わうことができる。コモの湖の美しさとともに、この安らぎを感じさせるような町並みや空間こそが、この国境沿いの湖水地方に点在する小都市の共通した魅力のひとつだと感じた。



図 4 コモ湖の淡水魚を活かした料理



図 6 ルガーノまでの案内標識

【メナッジョ - Menaggio - 】

コモの街から約 35km にあるメナッジョは、湖の西側に位置する保養地で知られる。この地域を散策すると、すでに自分がスイスとの国境の極めて近くにまで来ていることに気づかされる。なぜなら、道路標識やバス停の案内板に、ルガーノなどのスイス南部の都市名がいくつも見られるからだ（図 6）。試しに道行く人に尋ねてみると、メナッジョからルガーノまでは、車で 50 分もかからないという。異国の都市へと導く案内標識を見たとき、この地に住む人々は陸路で国境を越えて他国へ容易に行くことができることを実感し、何か不思議な感覚を覚えた。それは、日本で生まれ育った筆者にとっての「外国へ行く」という感覚が、この地の人々にとってのそれとは大きく異なっている、そのことを体験的に認識したことからくる驚きでもあった。

² コムーネとは、中世イタリアの北・中部で数多く生じた自治都市のこと

【コモ湖沿岸都市の使用言語の実態】

イタリアのコモ湖水地方に点在する小都市で使用されている言語は、それらの都市が観光避暑地として機能していることなどから、様々な言語を話す多くの人々が存在することは推測できるものの、あくまでもそこでの公用語は、当然ながらイタリア語である。例えば、博物館での主な解説文や案内板も、そのほとんどがイタリア語単独で表記されていた。また、レストランのメニューなども基本的にはどこもイタリア語で表記されており、時折、観光客のための英語版が用意されている程度であった。すなわち、後にボルツァーノで見るような、多言語表記の並記といった状況は、ここでは確認できなかった。このような使用言語の状況は、ベッラージオやメナッジョなど、コモ湖のいずれの小都市でも共通していた。

ルガーノ - Lugano -

【都市の概要】

ルガーノは、イタリアとの国境地帯にあるスイス南部の地方都市で、そこではイタリア語が公用語として使用されている。そもそもスイスでは、公用語として、ドイツ語(63.7%)、フランス語(20.4%)、イタリア語(6.5%)、ロマンシュ語(0.5%)の4つの言語が使用されている。そして、スイスのイタリア語圏は、ルガーノを含むカントン・ティチーノと、カントン・グラウビュの南端である³。



図7 ルガーノ

ルガーノは、イタリアのコモから鉄道で僅か30分の距離にある。筆者は、ルガーノとコモの距離的近さから、コモの街とさほど大きく変わらないのではないかという感覚を漠然と抱いていた。しかし、それが大きな間違いであることを、早くもルガーノ行きの電車に乗った瞬間に気付くことになる。というのも、ルガーノに向かう車両内の案内表記は、全てドイツ語が並記されていたからだ。コモに滞在している間、筆者が、ドイツ語表記の標識や案内板を見かけることは全くなかったのだが、ここにきて突然にドイツ語表記が数多く出現し、大きな驚きを覚えた。

国境を越えてスイスに入国し、ルガーノに到着した時、町中を歩きながら最初に気付いた事は、外にテラス席が設けられたバルなどの街の様子や、ジェラート片手に歩く人々の姿が、まるでイタリアの都市に見られる情景そのものであったことだ(図8)。しかし、一方で、道路はイタリアに多く見られる石畳よりもアスファルトで整備され、また、建物の多くは比較的新しく近代的に感じられ(図9)、イタリアの都市とは大きく異なっていた。それはまるで、スイスという異なった国の中に、イタリアの都市のライフスタイルだけがそのまま取り込まれているようでもあり、そのような不思議な感覚が筆者のルガーノの第一印象であった。

³ カントンとは、州のことを指す



図8 テラス席でくつろぐ人々



図9 近代的な建築のショッピングセンター

【ルガーノのイタリア語とその他の言語】 現地の方へのインタビューを通して

ルガーノで話されているイタリア語の調査に関しては、今回の研究旅行の重要な調査項目のひとつであった。そのため、現地の方からの聞き取り調査を確実に実現させるためには、ルガーノ出身で現地在住の地元の方と事前にアポイントをとり、少なくとも1名の方とのインタビュー調査を事前に準備しておく必要があった。これに関しては、筆者が本学で履修している「専門イタリア語」の非常勤講師S.メディチ先生が、偶然にもルガーノのご出身であることを知り、日本を出発する前に先生にお願いして、ご友人のひとりのマルコ氏を紹介して頂いた。

ルガーノ到着後、仕事場のオフィスにマルコ氏を訪ね、そこでルガーノのイタリア語、およびその他の言語の使用状況について詳しい聞き取り調査を行った。ルガーノで生まれ育ったマルコ氏は、公用語のイタリア語はもちろんのこと、他に、英語・ドイツ語・フランス語、そしてスペイン語まで話されるとのことであった。日本から来た筆者のインタビューを快く引き受けてくださったマルコ氏からは、ルガーノの言語状況に関して、以下のような情報を聞き取ることができた。

まず、ルガーノ地方のビジネスで使用される言語は、実際にはこの地方の公用語のイタリア語だけでなく、スイス全般で話されるドイツ語やフランス語も使用されており、それぞれの得意な言語話者の同僚には、それぞれドイツ語やフランス語といった具合に、日常的に皆、相手によって話す言語を使い分けている。実際に、インタビュー調査中もマルコ氏のオフィスでは、様々な言語が普通に飛び交っていた。1つの職場で、そのように多言語を日常的に使用している実際の現場を目の当たりにし、筆者は大変衝撃を受けた。ルガーノ在住のすべての人が、いくつもの言語を流暢に話せるわけではないそうだが、少なくともルガーノの学校における言語教育は、イタリア語を基盤としながらも多言語教育が普通に行われているようだ⁴。さらに、コモ在住のイタリア人が、スイスのルガーノへ毎日通勤しているケースも多いという。つまり、日常的な通勤圏が国境を挟んで存在しているわけである。このことから、国境というものの存在が、イタリア語という言語文化を共有するこの地域の人々にとって、決して、彼らの日常のライフスタイルを制限するような、強い存在としては機能していない可能性が推測される。

⁴ スイスは州によって教育内容が異なる。カントン・ティチーノでは、中学校卒業まで、仏語、独語、英語が必修科目となっている。

街から気づいた事

ルガーノの街中を歩きながら、様々な言語表記や交通標識・案内板などを細かく観察していくと、やはり、基本的にどれもイタリア語による表記が主になっていることが確認できた。しかし、同時に、フランス語の新聞やドイツ語のテレビチャンネルなどが日常的に存在しており、このような多言語が一つの都市の中に共存している状況は、イタリアのコモのそれとは大きく異なる点であった。印象的だったのは、タクシーの運転手が、運転の間はずっとイタリア語で話していたにもかかわらず、挨拶だけは、「Merci. (ありがとう)」とフランス語を使用していたことである。そのような、現地で体験した細かい事柄を拾い集めながら考えてみると、確かに、イタリア語の言語文化が南スイスの内部まで深く入り込んではいるのだが、それは決して完全な社会の「イタリア化」を意味しているわけではないということが、少しずつ見えてきたような気がする。このことは、出発前の事前学習では予想していなかったことで、実際に、自ら現地で体験する中で知りえたことであった。そういえば、マルコ氏も、自分がイタリア語を話すからといって、自らのアイデンティティーとして、自分がイタリア人であるとは感じていないという、不思議なことを語っていた。つまり、彼らは、国境を越えてイタリア言語文化を共有してはいるが、カントン・ティチーノには、多言語も含めた彼らの独自の文化が存在しており、彼らは、そこに自らの存在の拠り所を感じている。1つの共通した言語を話すことは、必ずしも共通の文化を共有し、同じアイデンティティーを抱いていることにはならないという、ある意味当たり前のことが、今回のルガーノ滞在を通して体験的に理解できたように思う。



図 10 イタリア語の標識

ルガーノ大学 — Università della Svizzera italiana — 訪問

ルガーノ大学は、授業はすべてイタリア語で開講されている。学生はスイス人のみならず、留学生として、イタリアや他のヨーロッパの国々からの学生、また中国人、日本人の学生も在籍しているようだ⁵。ルガーノ大学では、特に修士課程では、イタリア語やイタリア文化の研究が行われている。学生の多くは将来、イタリア語の先生になる者が多いという。なるほど、イタリア語が公用語であるスイス南部の地域では、彼らは常に必要とされる人材なのだろう。

マルコ氏の紹介でルガーノ大学を訪ねたが、大学の夏休み期間中であつたため授業は見学出来なかった。しかし、幸運にも、ルガーノ大学の図書館長に図書館内部を特別に案内していただくことができた。館長のお話によれば、図書館の蔵書も基本的にはイタリア語のものが多くを占めるらしい。また、スイスのイタリア語圏の人々が大学を選ぶ際の選択として、スイスの大学とイタリアの大学のどちらを多く選ぶ傾向にあるか、館長に尋ねたところ、どちらの選択肢もあるとのことであつた。ビジネスなどの「テクニカルな」学問はスイスの大学へ、一方、美術や建築など、「クラシカルな」学問はイタリアの大学へ行く傾向が多いとのことであつた。このような状況は、ルガーノを含めたイタリア語圏のスイス人学生特有の選択肢であり、ある意味、言語文化圏と国境の間の差異から生まれた可能性ともいえるだろう。私たち日本人学生には、とても羨ましい状況のように思えた。

⁵ スイス人は約 50%、残り 50%が留学生。そのうちイタリア人は約 20~25%。



図 11 ルガーノ大学



図 12 大学図書館 ルガーノ大学は建築学部がよく知られて、学内にも洗練されたデザインの現代建築が建ち並ぶ

【ロンバルド語について】

カントン・ティチーノは方言が多様であり、言語的または文化的にはイタリア北部の都市ミラノとの繋がりが強いといわれている。そこで、本調査では、イタリア語の広がりを明確にするために、ルガーノのイタリア語だけでなく、その地域一帯で特に使用されているロンバルド語という方言にも着目し、調査を行った。

ロンバルド語とは、先述したスイスの2つのカントンと、北イタリアのロンバルディア州で話される、イタリア語の方言群のひとつである。ここで、ロンバルド語の使用について、現地で新たに収集した情報をまとめて報告する。

CDE 研究所 (Centro di Dialettologia e di Etnografia)

ロンバルド語および、北イタリアや南スイスの方言についての研究を行っている CDE 研究所を訪問した。そこでは、同研究所内部を案内していただいた後、研究者の方に聞き取り調査を実施した。

まず、ロンバルド語とイタリア語の差異について研究者の方に質問したところ、ロンバルド語はまったくイタリア語と異なり、通常のイタリア語話者でも意思疎通は不可能だという。単語もイタリア語とは大変異なる。実際に、ロンバルド語で会話をしていただいたが、筆者にも全く聞き取ることができず、イタリア語とは全く異なる言語といっても過言ではない。

また、事前研究では、ロンバルド語はルガーノ地方でも話されていると理解していたのだが、どうやらそれは誤りで、正しくは、カントン・ティチーノのマッジャ (Maggia) 溪谷という地域のみで使われている言語だそうだ。その地域は、ルガーノから約 56km 北上した場所で、ロンバルド語はルガーノではほとんど使用されていないという。但し、それがイタリア語に属する方言であることは事実で、スイスの一部の地域で使用されていることも間違っていない。マッジャ溪谷はイタリアとは完全に断絶された、山に囲まれた地域であり、そのような地域のみでイタリア語の方言が残り、使われているという事実は筆者には大きな驚きであった。さらにその地域では、現在、特別な形でロンバルド語教



図 13 ロンバルド語の単語帳で埋め尽くされている棚

育が行われているわけではないというから、さらに驚いた。特別な意図的なプログラムなしに、口承のみで言語を伝えていることの難しさを感じたが、それでもこの言語が存在していることに言語文化の根強さを感じた。

スイス公共放送局 (Radiotelevisione svizzera) 訪問

スイスは多言語国家であるため、4つの言語の放送局が存在する。イタリア語放送は、RSI (Radiotelevisione svizzera) という、ルガーノに本部がある公共放送局が運営をしている⁶。

この放送局を訪問した際には、ロンバルド語のテレビチャンネルについて詳しい情報を得ることができた。カントン・ティチーノには、RSIの他に「Teleticino」という民間放送局がある。その中にロンバルド語が使われる番組がいくつか存在するそうだ⁷。また、具体的なデータは得られなかったのだが、説明して下さったRSIの職員の方によれば、数千人のスイス人がこの番組を視聴していることが推測されるという。

ちなみに、イタリアでは、衛星放送を通してしかロンバルド語の番組は見られない。イタリアでさえ、あまり放送されていないイタリア語方言の番組が、スイスで放送されているという事実は、かなり興味深いことだ。また、少数言語のテレビチャンネルを設けていること自体、スイスの多言語国家としての姿と、少数派の人々を大切にしようとするそのような政府の姿勢を垣間見た気がした。



図 14 スタジオ内の様子

ボルツァーノ - Bolzano/Bozen -

【都市と言語状況】

ボルツァーノ (イタリア語表記: Bolzano, ドイツ語表記: Bozen) は、イタリアの特別自治州のひとつトレンティーノ＝アルト・アディジェ州に属する山岳地方の拠点都市で、オーストリア、スイスの国境に接している⁸。現ボルツァーノ県の辺りは、歴史的にオーストリアとイタリアの間の国境線を巡る長い争いの地としても知られている。このような歴史的背景から言語圏が複数化し、複数の言語が共存する状況となっている。実際にボルツァーノ県内の人口の約



図 15 ボルツァーノの街並み

⁶ ちなみに、ドイツ語放送は SRF (Schweizer Radio und Fernsehen)、フランス語放送は RTS (Radio Télévision Suisse)、ロマンシュ語は RTR (Radiotelevision Svizra Rumantscha) というように、各言語圏によって放送局名も異なる。

⁷ RSIの職員の方によると、たとえば「Dimalami」という番組でロンバルド語が使用されている。この番組は、民間放送局 Teleticino のホームページ (<http://www.teleticino.ch/dimalami>) で確認できる (閲覧日: 2017年6月28日)。

⁸ 特別自治州とは、地理的、歴史的、文化的な特殊性のために、立法などの点で通常の州よりもおおきな権限を与えられている州のこと。イタリアの国境付近の、一般的なイタリア人とは言語や民族、歴史を異とする住民が住む。イタリアには全部で5つの特別自治州がある。

70%はドイツ語話者であるという統計が存在する⁹。そのため、この地は、現在でもイタリア語とドイツ語の2つの言語が公用語とされている。また、全体の人口の5%にも満たないが、ラディーノ語という歴史的希少言語も存在する。

ボルツァーノ駅に到着した時、すぐに、イタリアではない異国の地に来たような気がした。駅の案内板も、イタリア語とドイツ語の2ヶ国語で表記されていた。アルプスの山々に囲まれた街並みは、あのコモヤルガーノで見た風景ともまた大きく異なっていた。街中を散策しながら観察すると、確かに典型的なイタリアのバルやジェラート屋などが立ち並んでいるが、同時に、ビールやソーセージ、プレッツェルなどのいかにもドイツを想起させるような食べ物を売る店が多く軒を連ねていた。

【街の歴史：ボルツァーノ凱旋門】

この記念碑は、イタリアのファシスト政権が第一次世界大戦の勝利を祝って建てたものである。ボルツァーノは、広義的に「チロル地方」の一部で、オーストリアに帰属されていた時期が長かった。第一次世界大戦によってチロル地方が分割された際に、南チロルの人々はオーストリアから分離され、現在のボルツァーノが生まれたのだ。



図 16 ボルツァーノ凱旋門

記念碑に刻まれた碑文の一部には、「戦争によってチロルは分割し、南チロルの人々は母国オーストリアから分離された¹⁰。ボルツァーノ市は自由で近代的な民主主義の町として、過去の差別と分割に反対して、同時にすべての国家主義に反対して、同胞愛と平和の文化を真のヨーロッパ精神に基づいて推進していくことを誓う」と記されている。筆者は、この碑文そのものが、現在のボルツァーノが複数の文化を共存させているわけをそのまま物語っているかのように感じた。イタリアとドイツという異なった文化が融合した独特のボルツァーノの文化は、戦争とそれによる分断、そして差別という悲しい歴史のなかから生まれたものであることを知った。

【ボルツァーノのドイツ語の広がり】

街から気付いた事

前述のように、ボルツァーノではドイツ語とイタリア語の両方が公用語である。したがって、街中のほぼ全ての交通標識や案内板は、丁寧に2ヶ国語で表記されている(図 17, 18, 19)。ちなみに、コモヤルガーノでは、英語のレストラン・メニューが多数あったが、ボルツァーノでは、むしろイタリア語かドイツ語のみの店が多かったように感じた。中心街にはイタリア人以外の外国人が数多くみられ、イタリア語を話していた店員が、急に流暢なドイツ語で別の客に対応する場面に何度も出会った。ボルツァーノは、まさにバイリンガルの街であることを実感した。

⁹ 大澤麻里子「南チロルのドミニテ・ラディン語の母語継承—イタリア語とドイツ語の狭間で—」麗澤学際ジャーナル(23)、2015年、97頁より。

¹⁰ 「戦争」とは、第一次世界大戦を指す。



図 17 パトカー (polozia/polozei)



図 18 道路標識



図 19 案内標識

ボルツァーノ自由大学 –Libera Università di Bolzano

二

ボルツァーノでは、「ボルツァーノ自由大学」を訪ねた。そこでは、通常の講義はイタリア語・ドイツ語・英語で行われている。入学試験は、この3か国語のうち、必ず2か国語を選択して試験を受けなければならないということであった。この大学は、学位を取得するだけでなく、同時にトリリンガル（3言語話者）を育成することにも力が入れている、とのことであった。事前準備の中で、ボ



図 20 ボルツァーノ自由大学



図 21 ボルツァーノ自由大学の名称
上からドイツ語、イタリア語、ラディーン語

ルツァーノ自由大学には、ラディーン語習得の授業があるという情報を得たので、職員の方に詳細をうかがった。すると、ラディーン語の授業を受講する生徒は、全校生徒約3000人のうち、僅か10人程度しかいないそうだ。彼らは、ラディーン語地域でラディーン語の先生になるために学んでいるという。

【ラディーン語について】

ボルツァーノの言語について語るとき、決して忘れてはならない重要な言語がある。それは、ラディーン語というもので、この言葉は国の政策で保護されてきた歴史的少数言語のひとつである。現在は、ボルツァーノの他に、トレント自治県、ベッルーノ県の境界付近で使用されている。

ラディーン語の歴史は古く、古代ローマ帝国時代の約400年に渡るこの地域の支配によって、当時のローマ人がもたらした

Language groups in South Tyrol - Census 2011

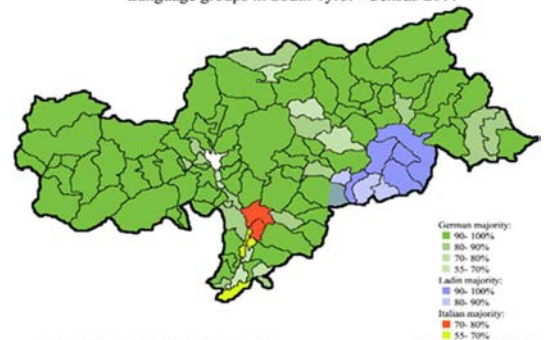


図 22 ボルツァーノ自治県の言語状況 (2011年)。ドイツ語=緑、イタリア語=赤、ラディーン語=青 (language_distribution_in_South_Tyrol,_Italy_2011.png より引用)

俗ラテン語の影響を強く受けて誕生した言語であるという。したがって、ラディーノ語は方言でなく、今日の標準イタリア語よりもずっと古い、イタリア語とは異なった歴史をもつ別の言語なのだ。実際には、標準イタリア語の方が、長い歴史をもつラディーノ語から派生してできたともいえるのである。

ボルツァーノにおけるラディーノ語の歴史

概要でも述べたように、ボルツァーノは国境線を巡る争いの地であった。ラディーノ語地域は、1363年から1919年までオーストリアの支配下におかれていた。当時そこでは、行政の言語はドイツ語、教会の言語はイタリア語、日常生活の言語はラディーノ語というように、3つの領域によって3つの言語が使い分けられていた。しかし、その後、中央集権化を強めたオーストリア政府は、イタリア語の排除運動を起こし、ドイツ語のみの使用が推進されるようになった。

続いて第一次世界大戦が終結すると、南チロルはイタリアに割譲されることとなる。すると、ボルツァーノでは、ドイツ語政策から一転してイタリア語化政策が展開された。さらに、ファシズムが台頭すると、ラディーノ語はイタリア語の一方言にすぎないと差別的な扱いを受け、ひとつの言語として認められなくなってしまう。ファシスト党ムッソリーニによる、かつての敵国チロル地方に対するイタリア化政策は熾烈なもので、ドイツ語やラディーノ語の名前をもつボルツァーノの住民には、イタリア語の名前への変更が強制された。このような歴史の影響もあり、現在では、ラディーノ語は一部の限られた地域でしか話されなくなってしまったのだ。言語圏の拡大や縮小、多言語の共存状況が、歴史の大きな変化や時の政府の政策などと深くかかわっている事実を学んだ。

ボルツァーノ市立博物館 — Museo Civoco —

ボルツァーノ市立博物館は、考古学および民族学的資料といった、ボルツァーノの歴史と伝統が展示されている博物館である。あいにく改装中で、展示資料の全てを閲覧することは出来なかったが、ラディーノ語について何らかの情報を得られないかと期待して、博物館職員の方に急遽お願いして話を伺った。

ラディーノ語は現在のボルツァーノでどれくらい使用されているかという筆者の問いに、今ではボルツァーノの中心街ではほとんど使われないという回答であった。それは、ボルツァーノ



図 23 ボルツァーノ市立博物館

県のドロミテ山塊を取り囲む5つの溪谷地域に、ラディーノ語話者たちの多くが移住したことによるらしい(図 22)¹¹。さらに、ラディーノ語教育は、今ではそれらの地域でしか行われていないという。実際に、お話を伺った博物館職員の方も、ラディーノ語話者の知り合いは誰もおらず、その言語に触れ合う機会もほとんどないそうだ。

¹¹ 特にガルデーナ溪谷と、バディア溪谷に住民が集中している。

トリエステ -Trieste-

【都市の概要】

トリエステは、イタリア北東部、オーストリアやスロベニアと国境を接するフリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア州に位置する、アドリア海の古い港町である。トリエステにはスロベニア系住民も多く住み、人口の少なくとも10%を占めているという。スロベニア語は、少数言語として保護され、トリエステ県では、スロベニア語で学校教育が受けられるほか、スロベニア系住民のための銀行や文化施設が存在するという。

トリエステの多くの建物は洗練されており、今回訪れた都市の中で最も落ち着いた雰囲気を感じた。また、イタリアで一般的に見られるパールとは異なり、より優雅で洒落た雰囲気のカフェが数多く存在しており印象的であった。街の雰囲気だけでも、国境の北のオーストリアの文化の影響が十分に感じられた。



図 24 トリエステ



図 25 街の中心の優雅な建物が囲むウニタ・ディタリア広場



図 26 豪華絢爛な建築物が街に連なっている

【トリエステのスロベニア語の広がり】

スロベニア語は、少なくともトリエステの公用語としては扱われていない。そのためか、ポルツァーノでみられたドイツ語のように、顕著なスロベニア語の使用はみられなかった。例えば、博物館のパンフレットやレストランのメニューは、ほぼイタリア語で、あるいは英語で表記されていた。また、今回訪れたトリエステの博物館の職員の方々に、スロベニア語の使用頻度を尋ねたが、「スロベニア系住民でない限り、スロベニア語の読み書きはできないし、使う機会もない。」とのことであった。ちなみに、郊外にあるバズビッツァ(Basovizza)という地域では、標識などのいくつかのスロベニア語表記のものを発見することが出来た(図 27, 28)。少なくとも、中心地と郊外の中で違いが存在することを確認した。



図 27 バゾビッツアの案内標識
上:イタリア語 下:スロベニア語

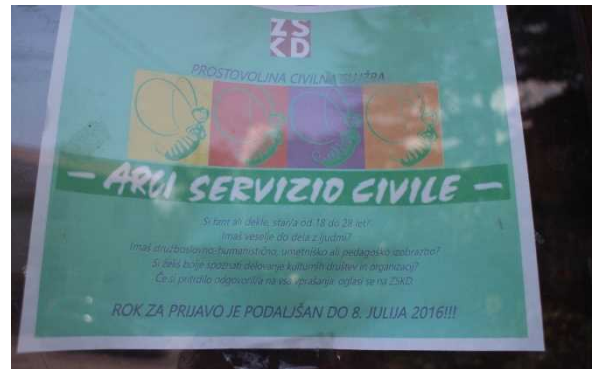


図 28 スロベニア語で書かれたチラシ

【フォイベ甌穴-Foiba of Basovizza -】

トリエステは、様々な支配を経た歴史を持つ都市である。ローマやアクレイア、ヴェネチアの支配後は、第一次世界大戦後にイタリア王国領となった。しかし、第二次世界大戦後にはトリエステを巡って、イタリアとユーゴスラビアの間で紛争が起きている。その後、トリエステとその周辺地域の領土問題は、トリエステ自由地域として国際連合管理下に置くこととされ、最終的に取り交わされたロンドン覚書によって現在の位置付けがなされた。

フォイベ甌穴は、第二次世界大戦後、一時的にこの地域をユーゴスラビアが統治した際に、イタリアのファシストへの報復として処刑が行われた場所である。モニュメントの他に資料館もあり、そこで、日本で得られなかった「フォイベ甌穴」に関する資料も入手することができた。

訪れたフォイベ甌穴のモニュメントは、かなりシンプルで、周囲は閑散としていたが、多くのモニュメントに花束が添えられていた。そのことが、この土地の歴史が風化していないことを物語っているようで、筆者の記憶に深く刻まれた。



図 29 モニュメントのうちの1つ



図 30 犠牲者のための祈りが捧げられている

【カステッロ -Castello-】

カステッロは、町を見下ろす丘の上に、1471年から1630年にかけて建てられた城である。堅牢な城であるが戦いの場として使われたことはなく、見晴らしの良い街の監視場としての役割を担っていた。

現在では、内部は博物館として公開され、古武器などが展示されている。加えて地下には、テルジェスティーノ石碑博物館がある。テルジェスティーノとは、カステッ

ロの丘にあった紀元前1世紀のローマ植民地の名前である。当時の石碑、彫刻、モザイクなどが多数展示されており、トリエステの古い歴史を辿ることができた。



図 31 カステッロ

●まとめ

今回の研究旅行で4つの北イタリアの国境周辺都市を調査していく中で、日本ではほとんど体験することの出来ない国境を超えた異文化の融合を、街の至る所で実感することができた。いずれの都市も、北イタリア周辺に位置しているが、各々の異なる色濃い特色が存在した。

事前準備では、国境周辺都市の文化は、その都市の国の文化よりも、隣国の文化が主流になっているのではないだろうか、と漠然と予想していた。しかし、今回の研究旅行を通して、その考え方はとても短絡的であったことに気付かされた。つまり、国境を挟んだ2つの地域の文化は、全く同じ文化を共有しているとか、一方が他方の影響を強く受けているというような単純なものではなかった。

実際には、隣国の異文化を自国の文化と共有しながら、さらにそれを、その都市独自の固有の文化として確立させている状況が確認できた。例えば、スイス・ルガーノの文化はそのような状況を顕著に表している。ルガーノでは、完全にイタリア語が主流であるが、その一方で、多言語国家スイスの中の一都市として、ドイツ語話者やフランス語話者、さらに少数言語のロンバルド語話者に対する配慮が細やかに行われていた。ルガーノのイタリア語の言語文化は、スイスの多言語文化主義と、うまく共生していることが見受けられる。つまり、そこでは、スイスとイタリアの互いの国の文化を、お互いの話者が、日常的に相互に尊重し合いながら生活している。

また、大国の間の戦争や争いによって国境が変化し、それに翻弄されるように文化圏も変容するという複雑なケースも存在することを知った。例えば、ボルツァーノでは、時代の権力者であったムツリーニによって、かつての敵国チロル地方のイタリア化政策の一環で、イタリア語使用が強制された。さらに、トリエステでは、支配国が幾度も変化する歴史的背景が、遺された歴史的モニュメントを通して強く感じられた。すなわち、彼らの多様な言語文化とその拡大や縮小は、その土地の支配を巡る国家の悲劇的な争いの歴史と強く結びついているのだ。

このように、国境を挟んだ地域の文化の諸相は、国境の変遷という様々な歴史的制約を背景に、その地域固有の姿を見せており、そのこと自体、極めて興味深かった。その背後には、過去の悲惨な出来事が隠されているケースが存在することを私たちは忘れてはならない。同時に、今日の希少言語の保護にみるように、その地域の多様な文化を維持し守ろうとする彼らの姿勢には、異なるものも受け入れ守る

うとする寛容性が感じられた。筆者には、その寛容性こそが、今回訪ねた国境周辺都市が共通してもっている最大の魅力のように思われる。近年、世界が直面している宗教や文化の違いを火種とした紛争、そして、異なった宗教や文化をもつ移民・難民を排除しようとする国際規模の社会現象を思うとき、国境とその周辺都市の多様な文化は、私たちに多くの示唆を与えてくれるように思えてならない。

●参考文献

和田忠彦 編『世界文化シリーズ5 イタリア文化 55 のキーワード』ミルヴァ書房、2015年。

吉満たか子「スイスの言語教育制作とティチーノ州のギムナジウムにおけるドイツ語教育」広島外教育研究 (16)、2013年、261-272頁。

増本浩子「スイスにおける多言語・多文化主義」神戸大学文学部紀要(37)、2010年、17-33頁。

大澤麻里子「南チロルのドミニテ・ラディン語の母語継承—イタリア語とドイツ語の狭間で—」麗澤学際ジャーナル(23)、2015年、95-114頁。
